短篇全集 5

鍵のかかる部屋

三島由紀夫短篇全集 5
鍵のかかる部屋

昭和46年5月20日　第1刷発行

著　者　三島由紀夫
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21／郵便番号112
電話東京（945）1111（大代表）
振替東京3930
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社　大進堂
定　価　650円

© Yōko Hiraoka 1971, Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

0393-135357-2253（0）　（文1）

目次

ラディゲの死　7
鍵のかかる部屋　21
復讐　63
詩を書く少年　73
志賀寺上人の恋　85
水音　98
海と夕焼　119
新聞紙　128

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

山の魂　135
牡丹　145
施餓鬼舟　150
橋づくし　161
女方　177
貴顕　196
あとがき　219

装幀　横山　明
依岡昭三

鍵のかかる部屋

三島由紀夫短篇全集5

ラディゲの死

これは、真らしいいつわりの自伝である

——レイモン・ラディゲ——

I

一九二四年、ジャン・コクトオは三十二歳である。紺碧海岸の東端の町ヴィルフランシュに滞在しているあいだ、毎晩港の前へ一人で来て、腰を下ろす習慣がついた。

毎夜の習慣から、コクトオは星の光り出す順序を知った。右手の空に現われるのが一番星である。ややあって、サン・ジャンの上に二番星がきらめき出す。最初の星が光ってから、第二の星が現われるまでのあいだに、海ぞいの暗い道を、一人の老人が山羊を綱で曳いて通った。

前の年の十二月十二日、巴里ビッシニ街の病院で、レイモン・ラディゲが死んでから、コクトオの心は不断の危機に在った。もともとこの詩人の精神は、軽業師のような危険な平衡を天性としていたのであるが、はじめて平衡を失しそうな危機に立ち至ったので、軽業師にとっては、このことは直ちに死を意味する。

一番星は俺だ、とコクトオは思った。彼は先達である。それから山羊を綱で曳いてゆくふしぎな若者たちが通った。二番星はラディゲである。それから星を輝やかすための本当の夜がはじまった。

II

レイモン・ラディゲの生れたのは千九百三年六月十八日である。第一次世界大戦のはじまったのが千九百十四年の夏である。おわったのが千九百十八年の暮である。ラディゲはその短生涯を形成する重要な部分、十一歳から十五歳までを大戦の裡に送り、作品製作のために剰された十六歳から廿一歳までの五六年間を、

戦後の混乱の裡に送った。

輓近の評論家R・M・アルベレースによると、第一次大戦後におけるフランス文学の「有毒な絢爛たる」青年期の時代、無秩序と独創性と非合理主義とシニスムの時代、「青年の小説」が一世を風靡した時代は、千九百年の知的革命の当然の帰結だというのである。「理性と信仰の価値についての前代の哲学的論争は、学校時代の思い出になってしまっていた。今は青年期であり、自由——人々はこの自由を、これまで存在したすべての人間よりもずっとよく利用してやることができるぞと信じていたが——であり、ついに許されたエコール・ビュイソニエール（学校に行かないで道草を喰ったり怠けたりすること）だった。人々は先祖や両親や家族から別れを告げた。それは《物識りで道徳的な市民的世界からの訣別、曠野の狼の完全な勝利》だった。人々は現存する世界をありとあらゆる馬鹿げたもの、それどころか、その価値すらないもので満たした。ちょうど子供が、両親たちの手から自由になるあの思春期と独創へ向う転機の陶酔のなかでするように」

大戦の終ろうとするとき、マックス・ジャコブが、見馴れぬ少年をコクトオに引合わせた。

詩人ジャコブは小肥りした田舎の司祭と謂った風采の男である。連れて来た少年はまた変っている。小柄で、蓬髪で、顔色はロムブローゾオのいわゆる「天才の顔色」、蒼白である。身幅のよく合わない背広を着て、横柄な様子で、ステッキを小脇にかかえている。コクトオはその風貌に、彼が好んで書いた「怠け者の生徒のもつ倨傲」を見出した。

コクトオとジャコブとの話のあいだ、少年は一言も喋らない。しばらくしてジャコブがこう言った。

「君はコクトオが好きなんだろう。恥かしがるのは君らしくもないな。詩を一つ見てもらいたまえ」

少年は黙って上着のポケットの底をさぐった。皺苦茶の紙片をとりだして、それをテーブルの上で、子供らしい手つきで、掌でもって伸してみせた。

コクトオはその詩を読んだ。そしてロンサアルの十六世紀古詩の面影のある、陰翳の深い単純さに一驚を喫した。

「磨きだされた貝殻のようだ」とコクトオは思った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

Ⅲ

……港を前にして、埠頭へ下りる石段に腰かけているコクトオの肩に手がかかった。彼は「死」が呼びに来たのだと感じた。

しかし掌は暖かく、揶揄するようにこう言った声には、聞き馴れた響きがある。

「やあ、死んだアンティノウスをしのぶハドリアヌス帝と謂った風情だな」

「マックスじゃないか」

ジャコブは笑って応じた。

「俺を忘れたのか。別に若くも美しくもないが、君の身を案じてパリからやって来たこの俺を。……あしたはもっと騒々しい見舞客が来る筈だ。君とこの間仲直りをしたストラヴィンスキーとそれからクリスチャン・ベラールと」

コクトオは微笑を以てこの報せをきいた。パリに生れ、パリに名をなし、パリに作品を售りながら、いつも明晰なパリからのがれて、野蛮で強烈で、幼年期そのもののように混沌とした自分の精神的故郷を探しまわっているこの詩人にも、パリの最上の要素だけがここへやって来るのを迎えることはいやではなかった。

彼はジャコブに毎夜見る星の話をした。一番星と二番星の話をした。しかし目前の空には、すでに無数の星がかがやき、それが閑散な港の水面に映発して、三四艘の碇泊している船の檣燈と見分けがたくなっていた。コクトオの有名な細く長く神経そのもののような鋭利な指は、夜空の中に一番星と二番星を探した。それはついに見分けられない。埠頭の二人の詩人の脚下には、紡われた小舟が波に揺れて、暗い軋り音をあげてぶつかり合っている……。

「ラディゲが生きているあいだというもの……」とコクトオは呟いた。「……僕たちは奇蹟と一緒に住んでいた。僕は奇蹟の現前のふしぎな作用で、世界と仲良しになった。世界の秩序がうまく運んでいるように思われた。奇蹟自体にはひとつも気づかずに、薔薇が突然歌い出しても、朝の食卓に天使が墜ちて来ても、鏡の中から、水のきらきらする破片を棘のように体中に刺されて、潜水夫がよろめき出て来ても、馬が大理石の庭にその蹄の先で四行詩を書き出しても、当然のこ

とのように、すこしもおどろかずに見ていられたのだった。そんなことは、当り前のことのように、僕たちには思われていた。僕は『奇蹟』と一緒によく旅行に出た。『奇蹟』は何と日常的な面構えをしていたろう！　……しかし今になってみると、朝の新聞が、自動車事故で五人家族が一度きに死んだり、建築中の建物が倒壊したり、飛行機が落ちたりしたことを、告げているのを見るたびに、僕はもしラディゲが生きていたら、こんなことは決して起るまい、と思わずにはいられないんだ。天の歯車が飛び立ってしまったから、世界という機械はぶざまな動き方をするようになった。貨車は脱線し、雞は車道へ飛び出し、パン屋はいくらパン粉をこねまわしても、ふくらまないパンしか作れないんだ」

「君のいうことはよくわかる」とジャコブは持前の甲高い声で言った。「君はラディゲを生粋の無秩序と認めていた。歌うべからざる薔薇が歌い出すような無秩序だ。君がラディゲの死を、地上的な原因に帰したがらない気持はわかる。しかし君と『奇蹟』との生活には、しらない間に地上の雑な秩序がまぎれ込んでくるような気がした筈だ。君は、といおうか、君たちは、といおうか、これに必死に対抗するために無秩序そのもののような生活を固執していたね。なるほどおかげで、地上の秩序はラディゲを殺さなかった。しかし天がラディゲを殺そうとしているのに君たち自身も手を貸したのを君も認めないわけにはゆくまい」

「それについては僕もたびたび云ったよ。作品をひとつ書かす毎に、僕は彼を安全地帯に封じ込めたと思っていたのだが、事実は、彼の底荷をとりさって、身軽にしてやっていたにすぎぬことを。

昨年の九月の末頃、田舎で『ドルジェル伯の舞踏会』を完成したラディゲと一緒に、僕はパリへかえってきた。秋が来た。あの秋から冬へかけての生活、十二月十二日の彼の死にいたるわずか二ヵ月のあの生活、……あの生活の片鱗は君も見ている」

「俺も見ている」

とジャコブは言葉寡なに応じた。

「破局へ向って傾斜しているおそろしいスピードをもった生活だった。おそろしい生活だったよ。しかし僕たちは、ああして暮すほかはなかったんだ」

Ⅳ

……コクトオは目を閉じて、その日々の暮しを思い泛べた。

まず寝台がある。その上には堆高い汚れ物が打棄てである。埃だらけの机には、本や手紙や勘定書が乱雑に置いてある。足もとには大小の空罎が転がっている。大きいのはコニャックの空罎である。小さいのは睡眠剤の空罎である。床に落ちた赤鉛筆にさえぎられて、一つのコルクの栓が静止している。

ある晩、というよりある朝、二人は酔いしれてホテルへかえって来たが、睡眠薬を薬屋で買ってくるのを忘れていた。丁度午前三時である。

そのことで二人は小さな諍いをした。巴里には終夜営業の薬屋が各所にあり、それが一軒毎に夜毎交替して、終夜軒に点している青い十字をたよりに、深夜の病人のためにも薬を買うことができるのであるが、このホテルから最寄の薬屋までも三四丁あり、どちらも今更買いに行くとは言い出さなかった。

「あれがないと眠れない」とコクトオはこぼした。

「僕だってそうだ。……でも酒を呑んだから、きっと眠れるよ」とラディゲが言った。

「しかし朝五時になると、あの塵芥あつめのトラックが、石畳の道をタンクみたいな音を立ててやってくる。あの音をはねかえすのは薬だけだよ」

「眠れるよ」とラディゲは断定的に言った。「僕たちは二人とも不眠症だと思っている。不眠症なんて、迷信だよ。そんなものはいらないさ」

「でも、薬がないとな」

コクトオは駄々をこねた。ラディゲは決して薬を買いにゆくとは言わなかった。

部屋はスチームで暖かい。窓は蒸気で曇っている。コクトオは窓硝子のそばへ立ち寄って、長い指で蒸気を拭いて、夜の街路に立ったまま死んでいる衛兵たちのように、葉の落ちつくした並木を見た。彼はラディゲの目の能く見ないものを見たのに満足した。ラディゲはふだん眼鏡こそかけていないが、一米突先もみえない近眼だからである。その窓硝子に白いものが動いたのは、背後のベッドのむこうでラディゲが寝仕度をして脱いでいる白いシャツが映ったのである。脱がれ

ることに抵抗しているシャツは、身悶えしている白い鳥の翼のようにそこに映り、やがて脱ぎ捨てられて静かになった。

あかあかと灯した乱雑な小部屋は、二人の共通の不安で息が詰まりそうだった。『眠れるだろうか？』という共通の不安……。

……灯が消された。二人は眠ろうと努力した。どちらもその努力を十分とつづけることができない。コクトオはそっと目をひらいた。窓の帷の合わせ目から洩れ入って来る瓦斯燈の光りが、かたわらのラディゲの横顔をおぼろげに泛ばせている。彼が好んでデッサンにとった若者の美しい横顔である。日頃、髪の毛から衣服から乱雑をきわめてはばかる気色もないラディゲも、自分の横顔のこの端麗な線だけは擾すことができない。

コクトオはラディゲの閉ざした睫がときどき軽く痙攣するのを見た。そのうちに、無感動に、その目がひらいた。目は闇の底で水のように光っている。

コクトオは深い息をして、自分も目をさましていることをラディゲに報せながら、こう言った。

「僕は今、君が子供のころ、家へ帰るのに汽車がなくなって、動物園のある森の中を横切ってゆくとき、獅子の吼えるのがこわくてたまらなかった、と僕に話したのを、思い出していたところだよ」

ラディゲは口もとで微笑した。

「僕、だって、本当に怖かったんだもの、夜って、獅子と黒ん坊でひしめいている国だと思っていた。僕は暗黒大陸という名をきいたとき、夜が獅子と黒ん坊の姿で昼間でも歩きまわり、あのものすごい太陽の下をゆく狩人は、木のかげから『夜』の牙や投槍にじっと狙われるような国なんだな、と空想したっけ」

ラディゲが煙草を喫みたいと云ったので、コクトオは火をつけて渡してやった。

「灰皿はあるかい？」

ラディゲは反対側の棚へ手をのばした。

ラディゲの指は、灰皿の縁にまで堆く溜っている吸殻に触れた。彼は更に手をのばして、落ち散らばっている原稿の反故の一枚をとりあげると、それに吸殻の山をぶちまけて、紙のはじを絞りあわせて、部屋の一

隅へ無造作に放った。
吸殻が紙包からちらばって床の上に落ちる音がした。
ラディゲは意に介せず、空になった灰皿をコクトオと自分との間に置いた。
「僕は昔、インスピレーションを追っかけて、よく莫迦なことをしたもんだ」とコクトオは言った。「あるときは角砂糖を一箱たべて寝たり、外套を着たまま寝たりして、どんな夢を見るかためしたもんだ」
「そのときはよく眠れたでしょうね」
「ああ、よく眠れた」とコクトオは笑った。
「僕も昔はよく眠れた」とラディゲは年寄の言うようなことを言った。「マルヌの河岸につないだボートの中でよく昼寝をした。ボートの木組の固い触感が、まだ背中に残っているような気がする」
二人は又しばらく黙った。
やがてコクトオが突然今までとちがった口調でこう言い出した。
「ねえ、レイモン、君は見神者の疲労って奴を知ってるか。神がかりの人間は、神が去ったあとで、おそろしい疲労に襲われるんだそうだ。それはまるでいやな、嘔吐を催おすような疲労で、眠りもならない。神を見た人間は、視力の極致まで、人間能力の極致まで行ってかえって来る。ほんの一瞬間でも、そのために心霊の莫大なエネルギーを費ってしまう。……君のいまの不眠症は、『ドルジェル伯の舞踏会』を書いた直接の結果にすぎないのさ」
「どうしても不眠症を固執するんだね、ジャン。不眠症なんて感情の病気じゃないか。ラファイエット夫人は、きっとそんな病気は知らなかったにちがいないな」
二人はなおも埒のないことを喋って、『眠れない』という固定観念から脱れようと試みた。しかしある瞬間に、その固定観念が目をさます。年長の詩人と、年少の小説家は、身を固くして、耳をすました。
空のまだ白みかからない街の彼方から、不吉な轟きが押しよせてくる。それはそこら中の建物を引っくりかえして進んでくるように思われる。市の塵芥あつめのトラックである。
「あの音が近づいてくると、僕はいつも轢き殺される

ような気がするんだ。眠っていても、夢の中にまであの音が入って来て、僕はきっと轢き殺される夢を見るんだ」

とラディゲが言った。

「どうして今までそれを言わなかったんだ」

これに対してラディゲは何か答えたようだったが、声は近づいた轟きに消されてきこえなかった。車のタイヤが街路の石畳と摩擦して立てる音が、道の両側の六階建の石造建築に反響して、倍になった。

そのトラックが通りすぎたあとは、二人とも又眠ろうと試みて、黙りがちになったが、窓に汚れた灰色の夜明けが、まもなくやって来た。

V

ラディゲの発病の日……。

十一月末の底冷えのする午後のことである。

二人はホテルを転々として、関係のある出版社にだけ居所を知らせて、会いたい友人にだけ会って、煩わしさからのがれた生活を送っていた。

コクトオは朝から引きこもって詩作をしていた。ラディゲは相も変らぬ放浪癖で、朝から散歩に出て帰らなかった。

午後になっても晴れ間は見えず、灰色の空が十八世紀以来の建築の多い灰色の巴里の街を領している。雨かと思って、窓をあけて手をさし出してみても、雨は降っていない。

ドアがひらいて、ラディゲが帰って来た。

髪はくしゃくしゃで、片眼鏡をはめ、横柄に胸をそらし、小脇にステッキを抱え、手には汚れた黄革の手袋をはめている。

「おかえり」

とコクトオは原稿から目を離さずに言った。そして付加えた。

「君のところへ『舞踏会』の校正刷が来ているよ」

ラディゲは黙ってステッキを椅子に立てかけて、散らかった卓の上の校正刷を手にとった。それからだらしのない様子で外套を脱ぎ、上着を脱ぐと、校正刷をもったまま、ベッドの上にごろりと仰向けになった。

「校正はもうみんな出たかい？」

とコクトオはまだ原稿から目を離さずに訊いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton